

## 聾と幼児教育

### 聾幼児教育の重要性(へい)

松 沢 豪

人は生れつきにか、或いは満三歳以前に何等かの原因により耳が聞えなくなると(これを聾又はつんぼといひます)殆んど例外なしに啞になります。これを聾啞といひます。啞になる原因には、この外、知能或いは性格の異常発語中枢の障害等がありますが、このように耳が聞えて、ことばのいえないものを聴啞といひます。

さて私がこれからのべるのは聾啞の教育についてでその中でも特に聾幼児教育についてであります。

正常児は普通満三、四歳までに話しことばとしての言語を一通り習得してしまひます。

このことは、人間にとって言語を習得するに三、四歳までの時期が非常に重要であることを教えているようです。所が聾児は就学義務年令が正常児と同じく満六歳であるために入学するのは満六歳かそれ以後であるのが我

が国の現状です。

ことばの入口として聴覚の代わりに主として親覚を使う聾児は、一定の段階と方法に従って教へ込まねば言語を習得出来ません。即ち教育に特殊の技術を必要とするのです。そのため聾児は、入学するまでの六年間ないしそれ以上の間、ほとんど何等の指導も受けず、従つて殆んど或いは全然ことばを持っていないのが普通です。

教育の始期のおくれる理由は、そのほかにもあります。自分の子供は、耳が聞えないのではないかということに親が気づくのは早くて生後一年位の時です。それは乳児期の時代に赤ん坊の発する発声には、耳が聞えても聞えなくても、そうたいして変りがないからです。即ち生後十カ月頃になると正常児は今までの喃語時代から一步飛躍して片言、一語文の時代に入ります。これに反して聾児は発声に関する限り喃語期を境にして急激に退歩を示していくからです。こうして、ことばをし

やべらないということに気づくと、すぐ耳が聞えないのではないかということにも気づきます。しかし、うちの子供はオクテだろうといつて三、四歳頃まで放任している親もありません。兎に角一歳頃から三、四歳頃までにはすべての親が我が子の聴覚障害に気づきます。以上は先天聾の場合ですが、後天聾の場合

にも例えその子が不自由なくことばをしゃべつていても、満三歳頃までにどういふ病気にせよ高熱を伴う病気をしたり、新葉ストレプトマイシンの副作用などによつて聾になると急激にことばを忘れて啞になるのが普通です。先天聾にせよ、後天聾にせよ、実は聴覚障害に気づいたらすぐ教育を始めなければならぬのですが、すべての親は、医学的処置により聴覚障害はなおらないものかと、二、三年の間は病院めぐりをします。親の情としては無理のないことです。しかし聾に関しての医学的処置は殆ど皆無で、教育的処置による以外に聾児を救済する方法はないのです。これは聾児を持つ親に対しては惨酷な断言ですが重要なことです。

このような次第ですから、一般に我が国の聾児の言語指導及びこれを含めての教育は特別に熱心な親の行ふ早期教育を除いては就学してから始まつています。これでは最も重要な言語習得の時期を既に失しているわけですから。満六歳以後に教育を始めることの損失はこればかりではありません。コミュニケーション或いは思考の手段として私たちが使用していることば(音声言語)を持たない聾児はこれを身振りや手まねで果たすようになりま

す。根本的には、耳が聞えないために更にはその結果として聾児にとって、いわば自然発生

的な身振り手まねを中心としたコミュニケーションや思考は、聾児をして環境理解の仕方私たちと異質的なものにしてしまっています。

教育を受けない聾児のパーソナリティは、既に幼児期後期において強いかたよりを示します。これは聾児が入学してから受ける教育特に聾教育の中心をなす言語指導を進める上にも重大なる障壁になってしまふのです。幼児初期の聾児の如く、比較的白紙に近い状態で入学すればまだしも教育に支障を来たすものを強く大きく持ち込むための教育効果のマイナスは図り知れないものがあります。

アメリカのセントラル・インスティテュート聾学校やクラーク聾学校で幼児期から早期教育を受けた聾児たちは、小学部を終ると、大部分が普通の中学校へ入学しています。現在我が国の聾教育の成果がアメリカなどに較べて劣っている直接的な原因は、教育を始める時期がおそいためだと考えられるのです。

私の経験を通して見ましても教師と親が共に幼児教育を進めていくなら、満三満或いはそれ以前の時期に入学した聾児が六歳児になって幼稚園を卒業するまでに、知能及び性格などが普通であれば、千二百ないし千五百の語い(彙)を習得し、優秀な子供は千八百ないし二千三百位の語いを獲得しています。そしてこれらの聾児は、日常生活を我々と同じく音声言語で用を足しており、小学部に進むと正常児が使う教科書を使用することも可能になっていきます。

又聾児の思考の異質性やパーソナリティのかたよりも、その芽生えを摘みつ、幼児教育を進めていくなら、聾幼児も大体正常児と同じような成長を遂げているのです。

聾児の生活する社会は正常人の形成する社会です。すなわち聾児もこの正常人の形成する社会に適應しなければ生きていくことが出来ません。従って聾学校は聾児に正常人の形成する社会への適應のしかたを教える機関だといえます。所が現在の進歩した聾教育者は聾学校は普通学校への橋渡しの機関だと申します。

現在我が国の聾学校には一般に小、中、高等部の各部があり、高等部には一、二の職業科があります。そして私共の学校の外、市川大阪、名古屋の各聾学校では幼児教育を行っています。私共が幼児教育を行う以前は、たまたま一、二の例外的存在を除いては、総ての聾児が高等部を卒業して始めて普通人の社会へ飛躍していたのですが幼児教育を行って見ますと個々の子供によって違いはありますが、必ずしも高等部を卒業するまで聾学校に必要はなく普通の小学校、中学校、高等学校へ飛躍出来る子供が相当出てくること外国の例を待つまでもなく判明してきていま

す。聾学校は普通学校への橋渡しの機関であるとすると、聾幼児教育を前提にして始めて成立するものです。又聾学校では高等部に進みますと専門部職業教育を行い一人前の腕を持たせて社会に送り出すようにしています。この職業教育にしましても陶治する時期が大切なことは申すまでもありません。六歳以後に入学した聾児が例え高等部に進みましても、職業教育の基礎になる普通科の力がこれを充分に受け入れられるだけのものになっていなければ、本当の職業人にまで別達することは至難なことでありませう。

普通科の力を充分につけようとするれば職業陶治の時期がおくれ且つ短かくなってしまう。こういう意味からしても教育の時期を早めることが重要であることが分ります。

最後にここ数年來我が国の聾教育は理論的に實際的に目覚しい発展を続けています。特に補聴器の進歩に伴う聴能教育の開発は聾教育進展の上の一時期を劃するものといえます。然しこれらの総てを幼児期からの聾教育に採用しなければ、聾児の教育効果を現状より飛躍して進展させることは困難なことでありませう。

聾幼児教育は聾教育解決の基本的条件をなすものであり、聾教育にとって絶対不可欠のものであります。(日本聾話学校幼稚部主事)